

## 天 災 地 変

昔から「災難と不幸は忘れたころにくる」といわれるが、実際本県——とくに本町では、忘れるどころか、ほとんど毎年といってよいほど、ひでりや・大水・虫害・台風などが起って、農民の悩みはなかなか並みたいいではなかった。元来わが讃岐は、山が浅く川が短いので少しのひでりにも水が枯れ、反対に一度豪雨があるとたちまち大水となって田畑人畜が浸される。明治二十七年から昭和三十年までの統計によると、香川県をかすめ、または通過した台風は六十回で、約四年ごとに一回、ひでりもそれと同様四年ごとに一回、両方を合せると約二年ごとに一回あることになる。幸い近年はため池やダムがよくなり、水の使用法もしだいにじょうずになり、有効な農薬も発明されたので、ひでりや病虫害などの心配は少なくなったが、台風の被害は今も昔も変りはない。

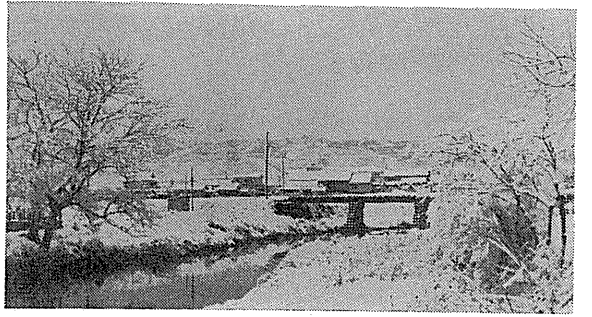
明治二十七年の大ひでり ちょうど日清戦争のまっ最中である上に、大旱害が起こり稲作は全く皆無となり、人々はわずかにおかゆといもで命をつなぐというあわれなありさまであった。四月二十六日から九月十日ごろまで、約

百三十五日間余りはほとんど雨らしい雨はなく、飲料水にも事欠ぐという状態で、水争いはそこに起った。しかしかえ釣るべやみず車はもちろん、井戸や堀を掘ったりして何とか飯米だけとは、果ては小さい土びんで稲の根元へ水をやったりしたが、けっきょく何のききめもなかった。老人の話によると、こんなひでりは後にも先きにも見たことも聞いたこともないといっていた。

大正元年の大水 大正元年九月二十一日、朝から大雨が降り出し、その上強風が加わり、夜中になって一層激しくなり、阿讃山脈の谷から滝のように流れ出る流水は、たちまち川一ぱいになって、いたるところの堤防がこわれ、濁流が田畑や家屋に浸入した。

役場吏員・警察官・消防団員・地方民らが総出となり、夜どおし警備につとめたが、川幅が狭く屈曲の多い川なので手のつけようもなく、たちまち橋は落ち、道路や田畑は没して見渡す限り一面の泥海となり、ところどころに山崩れが起こり、ため池は切れ、低いところでは床上高く浸水して米穀は腐敗し、家具人畜は流され、農作物は冠水倒伏するなど、全く目も当てられない状態となり、生きた心地もせず、ただ恐怖におびえて一夜を明かしたが、翌日になって風雨もしだいに止み、浸水もようやく減少したのでやっと安心した。町内では下高岡の新開・田中の天枝で堤防が切れ、朝倉の大墓では前池が切れた。

昭和二十一年の地震(南海地震) 昭和二十一年十二月二十一日の夜半突然大地震が起こり、家屋が倒れ、道路が破損し、鳥居や石とうろう等が諸所で倒れた。このとき氷上の堀切池の堤防が下の方で約五・六十メートルばかり東西に崩れた。幸い決潰(けつつかい)寸前で大事に至らず、死傷者も家屋の流失もなかった。



大 雪

同三十八年の大雪 この年の寒さは四・五十年ぶりとか、新正月以前から毎日風速二十メートル余りの強風が吹き続き、それが雪吹雪となって、神山や田中などの山間部ではほとんど連日家に冬ごもりをしていた。池ではこどもが氷すべりをしていたところもあった。

ことに一月二十一日(旧十二月二十八日)午後八時ごろから降り出した大雪は夜どおし降り続き、ようやく翌二十三日午後一時ごろになってやんだ。山地では四・五十センチ、平地では二十センチぐらい積った。この雪はなかなか固くて一週間もとけなかった。

このため山間部のバスはことごとく止まり、電車も全部運転休止となり、神山第一・第二・小叢小中学校等はいずれも一両日間臨時休業を行ない、その他の各小中学校でも全部午前授業であった。

○ふる雪や明治は遠くなりけり。

中村苗田男

同年の長雨 この年はいったいどうした年であろうか。前年の暮から翌年の春にかけてはものすごい寒さで、たびたび各地に大雪があり、また晩春から初夏にかけては、これまた七十年ぶりとも百年目という雨が、毎日晴れ間もなく降り続き、農繁期に入っても晴天という晴天はわずか一兩日ばかり、その他は全く雨天続きで、やっと六月二十六日になって晴れ間が見え出した。

この長雨のため、本町では六月五日の午前九時ごろ、西鹿庭の「隠れ谷池」が切れ、潮の如く濁流が走り付近一帯の田畑を押し流し、損害が四百万円を越えた。なお町内農作物の長雨による被害は左表のとおりで、その他の損害を合算すると実に三億円以上だといわれた。

種類	作付反別(ha)	減収量(トン)	被害率(%)	被害金額(千円)
裸麦	五六四、〇	一五七二、五	九五	六五、五一六
小葉たばこ	六〇八、〇	一三七五、五	九〇	五五、〇二〇
果樹	一七七、〇	一四一、〇	四〇	六三、四五一
すいか	一〇〇、〇	八二五、〇	五五	三三、〇〇〇
かぼちゃ	一〇八、〇	一九五三、〇	六〇	五二、七三一
	三七、七	四七一、〇	五〇	一三、六六四

そのうち、とくに麦類の被害がいかに大きかったかは左表の麦類政府買上げ収数によって推知されるであろう。

年 度	裸 麦	小 麦	合 計	比 率
平 年	二〇一、一四九呎	三一、六五九呎	五二、〇〇八呎	一〇〇%
昭和三十八年	三三八呎	九九六呎	一、三〇七呎	二、五%

国会議員は長雨被害対策県民大会を開催し、県では政府に特別立法措置を講じてもらうために陳情団を上京させ、社会福祉協議会は特別貸付資金を実施するなど、まことにテンヤワンヤの大騒ぎであった。